

## 第4代中央気象台長

## 岡田武松事蹟(Ⅳ)

## 附略年譜

堀内剛二\*

## 7. 中央気象台長岡田武松(承前)

## 7.3 サイモンズ金牌

大正後期より昭和にかけ日本の気象学は隆盛を來した。大正11年気象集誌はその第41年9号を40年記念号として特集、論文18篇、総頁250頁に及ぶ大冊で、懸賞論文は応募14篇、すべて中堅職員の手になった。この年帰朝の藤原咲平が渦動論を發展したことは既述した。劇務にも拘らず、武松は一連の季節相関論文<sup>(1)</sup>に続いて、北海道米作と気象の関係を論じ<sup>(2)</sup>、またいち早く台風眼<sup>(3)</sup>について報告した。

武松は、既に大正10年(1921)、英国王立気象学会の fellow となったが、震災直後の大正13年(1924)1月16日、同王立気象学会年会は岡田武松に Symons Memorial Medal 授与を決定、同年会席上武松代理の林大使がこれを受けた。その際読まれた業績は次の如く結ばれた<sup>(4)</sup>。

“Professor Okada is a man of science as well as a man of administrative faculty, and the present progress in meteorology and of the meteorological service in Japan owes much to him.”

時の会長 Dr. C. Chree Sc. D., F. R. S. は述べた。

“...as the statement of the work of Professor Okada had been read it was unnecessary to say much on that subject. ...In awarding it this year to Professor Okada it would be taken as representing the value that the Society placed on recent meteorological work in Japan”

英人以外の受賞者は、G. v. Hann (1904), L. Teisseranc de Bort (1908), C. Abbe (1912), C. A. Angot (1916) H. H. Hildebrandsson (1920)、に次いで岡田武松(1924)であった。海洋気象台では、同2月13日海洋気象台並に神戸測候所職員よりなる厚信会主催の祝賀会を開いた。

続いて、大正14年1月21日、武松は C. G. Abbot, F.M. Exner 等と共に英王立気象学会名誉会員に推薦された。

- (1) Journ. Met. Soc. Japan Ser. 1 **34** 15, 1915 etc.
- (2) Journ. Met. Soc. Japan Ser. 1 **36** 91, 1917; Month. Weath. Rev. 1921.
- (3) Journ. Met. Soc. Japan Ser. 1 **37** 307, 1918.
- (4) Quart. J. Roy. Soc, 1924
- (5) 同上

\*気象庁研修所

この年は、また奇しくも、明治8年赤坂葵町3番地にて定時気象観測が始められてより満50年に当り、その6月1日、元衛町1番地バラック庁舎に中央気象台創立50周年記念式を挙行した。前台長中村精男、本邦初期気象事業功労者正戸豹之助、馬場信倫、近藤久次郎、西山幹三郎、水科七三郎、井口竜太郎等が招かれ、折から第19回全国気象協議会に上京中の各地方測候所長その他が出席した。冒頭武松は式辞を述べた<sup>(1)</sup>。

「中央気象台の創立は明治8年にして本年6月1日即ち本日にて正に五十周年に相当する訳なり。五十年の星霜は気象事業より云へば短しと雖も人生としては長き歲月なりと言はざるを得ず。此の長き歲月一日も欠測なく気象観測を継続したるは恰も人生が無事息災に老年となりたると同様誠に目出度き次第なりとす。本席に本邦の気象事業を創設され之を育て上げられたる方々を御招き致し、五十周年の祝賀会を開催し得たるは拙生の光榮とする所なり」

既述の如く、明治7年生れの武松は日本気象事業より一年の年長で、既に齡50を越えた。この式辞を述べつつ、彼は自らの過去を憶ったであろう。

武松は、この日「朝野の名士の御臨席を願ふ考へなりしが震災後のこととて事情止むを得ず内祝とし」という。測候所長総代前田直吉、来賓正戸豹之助、馬場信倫、中村前台長、それぞれ祝辞を述べた。当日測風塔に各種器機写真を陳列、夜は上野精養軒に祝宴を張った。

翌大正15年1月武松が東京帝国大学教授兼任となったことは既述した。同5月12日附を以て高等官1等に陞叙され、9月13日チューリッヒにて開催の国際気象協議会常置委員会議出席のため8月10日渡欧被命、13日藤原咲平と共に出発、帰朝は同年末の12月23日。その2日後昭和に改元となった。この渡欧については、測候所談録附録「欧州気象台巡回談」に詳かである。

大正14年、西村伝三、和達清夫、小平吉男が奉職した。同年2月堀口由己の神繩台風報告第1報が見られ、これにより後学位授与、学士院賞授賞となる。この年10月、附属測候技術官養成所第1回生15名がその業を卒えた。岡田群司は、大正10年8月13日、武松の妻みつの妹、海老原豊子と婚姻、やがて長女瑤子を持った。大正15年日高孝次と共に中央気象台に入り、昭和2年3月、いず

(1) 気象協議会議事録

れも技師となって海洋气象台に転じた。昭和3年4月、大谷東平、島山久尚、肥沼寛一、倉石六郎、が中央气象台に奉職した。同じ年川畑幸夫は陸地測量部に入り後養成所に転じた。

海洋气象台では、大正15年8月、鉄筋2階建書庫が望遠鏡室西に出来、昭和2年3月、銅製ディーゼル、124トンの海洋観測船春風丸の竣功を見た。翌3年8月印刷工場が成った。

春風丸の進水によって本格的海洋観測開始、昭和4年6月以降海洋時報によってその資料を公刊した。

この間、海洋气象台技師岡田耕司は、昭和3年末精密時計の修理及製作の研究の為スイス留学被命、4年2月28日出発した。昭和5年8月、既にして、海洋气象台は創立10周年を迎へた。

#### 7.4 航空気象

この時、時代は大きく暗転しようとしていた。第1次大戦当時の好況に比して、戦後の不況は漸次深化し、大正14年の陸軍縮少、昭和2年の15銀行休業に続くモラトリアム、昭和4年(1929)のニューヨーク株式大暴落に伴う世界的大恐慌、そしてその10月官吏減俸の実施を見た。これらは、濟南事変(昭和3年5月)満州事変(6年9月)上海事変(7年1月)となり、満州国建国(7年3月)に至った。

時代の一面を示すと同時に気象に関連する航空事業に注目すれば、大正12年3月航空気象が中央气象台事務分掌に加わったことは既述した。大正14年4月東京大阪福岡に郵便飛行開始、昭和4年3月日本航空輸送株式会社開業、同8月ツェペリン伯号来日、昭和5年8月吉原飛行士欧亜飛行成功、そして昭和6年5月航空研究所の開所を見た。

この間航空関係記事を中央气象台一覧より摘記すれば「(昭和5年)8月22日勅令第150号を以て气象台官制中改正、中央气象台掌理事務中「航空気象の観測及調査並に航空機に対する天気予報及暴風警報」の項を加へらる。同時に定員中技師21人を25人、書記13人を16人、技手104人を113人に改正せられ、中央气象台支台三箇所を新設す。8月25日文部省令第20号を以て气象台測候所条例施行細則中改正を加へ、中央气象台支台及同附属測候所の掌理事務を規定せらる。同月25日文部省令第21号を以て附属測候所及附属地磁気観測所の位置及名称に関する件中改正し、大阪三島、福岡に中央气象台支台を、箱根山、亀山、富江に附属測候所を設置す」

「昭和6年7月勅令第196号を以て气象台官制中定員書記16人を17人に改めらる。9月4日東京飛行場内日本航空会社の建造物の一部を借用し、中央气象台羽田分室を置きその事務を開始す」

羽田分室の業務は「主として天気概況及航空路上の天候等を午前7時頃と正午の2回に飛行関係の向きに通

知<sup>(1)</sup>」すること。なお、既に昭和6年1月から気象要覧に「上層気流」欄が出来、同4月よりは航空気象図を刊行。海面、500米、1000米、1500米の4枚一組、等温等圧線、地磁気等偏角線、及び風向風速図を含んだ。

富士山頂観測所の建設は主として佐藤順一の尽力によった<sup>(2)</sup>。山階宮武彦王父の遺志をつぎ、従来の縁故によって建設事務を佐藤に委託、佐藤は大正15年8月諸準備をととのへ、昭和2年初夏これを建設した。

「家屋は木造平屋で約19坪あり観測者居室2、器機室1、事務室1、情人居室1、炊事室1の6室より成り屋上中央に1坪の風力合がある。各側面及び屋上は石室の式に抛り石を積みて風害を防禦することになっている。百葉箱2基、約110耗の望遠鏡、ラジオ受信装置、等の設備がある」

続けて、武松が「本事業を非常に賛助」したと佐藤は記した。

佐藤順一は昭和4年1月雪中富士山頂にて観測を行い、昭和5・6年いずれも30余日を山頂に過して日々定時観測を行った。昭和7年7月4日国際協同極地観測のため、文部省告示第178号によって、富士山頂、同山麓(船津)に臨時観測所、また豊原に臨時地磁気観測所、の設置が決定を見た。

「第2極年中の高山気象観測所を富士山頂に設けた関係上山麓観測所を同山の南北両側に設けないと比較観測が出来ない。去りとて経費の関係もあること故三島支台と箱根山観測所を南側の山麓観測所に代用し北側では甲府測候所ではチト速きに失するので、船津村に山麓測候所を設け既に本年(昭和8年)1月1日より正規の観測を開始した<sup>(3)</sup>」

船津山麓観測所の敷地は、岩波茂雄の寄贈になった。

飛行機による気象観測の始まったのも、また、この昭和7年であった。

「中央气象台においては飛行機による航空気象観測を企て兼て測器万端を整へた。去る(昭和7年)7月15日午後1時静岡県三保之松原に於て中央气象台嘱託根岸一等飛行士操縦、淵技手同乗して第1回の観測を行った。使用した自記気象器機はマルビン式汎用のものを少し改造して使用<sup>(4)</sup>」

この経緯については、武松自ら次の如く記した。

「前記根岸飛行士はかねてより静岡県三保半島に飛行場を経営し静岡県の依頼をうけ飛行機により魚群の搜索を試みた。又本台関口技師令兄加藤周蔵氏の親友なる清水市の鈴木与兵衛氏は根岸氏を後援して居られた関係上関口氏より本台に於て兼て飛行機にて気象観測を行はんとする計画があるから、旨を述べて鈴木氏

(1) 測候時報2巻27号昭和6年

(2) 佐藤順一、気象集誌2輯5巻9号

(3) 岡田武松、測候時報4巻2号

(4) 岡田武松、測候時報3巻昭和7年

の御世話で根岸飛行士に囑託して事業を開始することとなり、観測の準備は主として本台測候掛員淵秀隆氏が之を担当した。又飛行機に使用するガソリンは小倉石油株式会社長常吉氏より全部本台へ寄附せらるることとなり、茲に漸く事業を開始し得る運びとなった<sup>(1)</sup>」

上記第2極年について云えば、<sup>(2)</sup> 昭和4年(1929)9月10日コペンハーゲンに国際気象委員会開催、武松代理として関口鯉吉が出席した。ここで、昭和7~8年(1932~33)を第2極年とすることに意見一致、共同観測参加を勧告された。依って参加希望の旨と予算を文部省に提出したのが昭和5年5月。その8月26~30日レングランドに極年委員会開催、日本よりは滞欧中の田中館博士が出席、昭和7年8月1日より同8年8月31日までを第2極年と決定し、観測所分布、観測時刻方法を定め、観測は主として気象、地磁気、空中気象、極光等とした。これによって、中央気象台は、上述の通り、樺太豊原、富士山頂安河原、山梨県船津村にそれぞれ観測所を設けて極年観測に参加し、且つ羽田出張所で測雲観測を為し、福岡、大阪、沖縄、三島、各支台羽田出張所で測風気球の二点観測を為し、三保では飛行機により天候の許す限り3000乃至5000米位までの気象観測を為した。館野高層気象台では古河又は本庄へ出張して探測気球を飛揚し、柿岡地磁気観測所も豊原と呼応して共同観測に参加した。

なおこの時期の雷雨警報について附言する。<sup>(3)</sup> 発端は昭和3年電気学会にて藤原咲平が「雷雨について」講演し、その予測の可能性を示したに始まる。当時鉄道省では電化事業進行中、同6月1日鉄道省佐竹技師、東京電燈藤本技師来台して雷雨警報を依頼した。そこで昭和4年5月9日打合せを開いて技術面を検討、5月20日より開始した。従前より武松は雷雨予報の必要とその可能について屢々掛員を激励したが、昭和8年より雷雨予報を新事業として始めることとなり、7月16日より開始した。

### 7.5 岡田気象学と Climate of Japan

海洋気象台創業以降の繁忙の裡に、昭和2年10月武松は大冊「気象学」初版を、翌3年12月気象学講話増訂版を、岩波書店よりそれぞれ刊行した。

気象学初版序文によれば、

「気象学を修めやうとする方々の参考となる書物の著述を思ひ立ったのは何でも5・6年前のことであった。草稿が略々纏ったので、岩波君に出して載かうと思つてみたところ、不幸にもあの震災の爲めに、原稿をすっかり焼いて仕舞った」

従って、気象学執筆は海洋気象台創業直後の大正10年頃に遡ることとなり、震災までの約2年半に一応脱稿を見たことが知れる。震災後の復旧は、気象学原稿のみで

なかった故、流石の武松も「再び起稿するのも何だか億劫」に思ったが、「この種の書物を著述して学習の便を図るのが永年此事業の御世話になってゐる自分の職責の一部でもある様に感じ」再度の筆を執つたという。

第1篇一般気象学は、気圧気温に始まって気象学のあらゆる項目に亘り詳説すること31章、第2篇天文学は天気予報を扱って3章、第3篇気候学は2章、以上すべて36章 850頁。附録1数理の解説では本文で避けた数式を補って150頁に及び、附録2引用文献30頁、それに索引及び図版10葉を附し、総頁数1000余頁であった。

「本書は(略)出来るだけ実地の役に立つ様にしなければならないので、器機の説明や其取扱法の様な専門的事項は、寧ろ丁寧過ぎる位に述べてある。夫故に記述が管々しくて気が利いてゐないのは止むを得ない。

(略)私の名は著としてあるが(略)決して著作などと潜称すべき筋合のものではない。夫故に自家の意見は殆ど述べず専ら内外の学者の論旨を紹介するに止めた。この為、書中に研究家の名を掲げるところが甚だ多い。只台風とかか梅雨とかいふ現象に就ては別に之と云ふ定説がないので、止むを得ず愚見を記することとした」

藤原咲平はこれを次の如く評した。

「本書に接して更に感深きは、従来各種教科書に於て見る如く學問を完成せるものの如くには取り扱つて居ない事である。是は初学者に対する強大な暗示として斯学が更に大に発達すべき道程に有るを示すものである。聞くが如くんば、本書は原版刷で有ると云う。即著者は學問の進歩の大なるべきを予見し紙型によりて重版することを考慮せざるが為である。」

「もし難を云ふ人があれば其れは未だ多少の誤植と仮名遣ひが直り切らぬ事及著者が文字の統一と云ふ様な事をてんで頭から問題にしてない事で有らう」

この「気象学」は通称「岡田気象学」と呼ばれ、後昭和10年9月大半を改稿して「改稿気象学」上下2巻となったことは周知である。

昭和5年、岩波講座物理学及び化学のうち宇宙物理学の一部として武松は「地球磁気学」を刊行した。これは日本においてその方面の最初の著述であった。

翌昭和6年3月、その主著とも称される Climate of Japan の公刊を見た。菊倍版、本文328頁、索引10頁、附図35葉。本文第1部は Climatography で、第1章総説に続き、第2章南樺太より各気候区毎に第18章朝鮮に及び、第2部 Climatology は、第1章気温より各要素毎に第14章降雪に亘っている。第3部は表で、すべて61表である。

本書は、その自序にも記されている如く、中村精男「大日本風土篇」(1893年)刊行以来37年を越え、その間の観測網の増大と資料蓄積によって要求されたものであった。武松は昭和4年(1929年) Climatic Atlas of

(1) 岡田武松、測候時報、3巻、昭和7年

(2) 岡田、測候瑣談

(3) 測候時報4巻22号

Japan and her Neighbouring Countries を完成直後、当初それに添附する解説書として執筆したものが本書を成したという。記述を補足して多数の表を掲げ、また文献を挙げた。この書は第2次世界大戦中アメリカに於て翻刻されたと伝える。

続いて、同じ昭和6年の9月「気象器械学」が岩波書店より刊行された。類書も稀な本書の主旨は次の如くであった。

「初めて気象観測に従事しようとする仁は、先づ以て測器の構造とその使ひ方を能く心得てあり、出来得べくんばその癖までも充分呑み込んで置かなければならない。この点から考へても邦文で書いた測候器械の本が是非必要だと思ふ」

そして、自序後段に次の数行が見られる。

「早起きの癖を利用し早朝少しづつ執筆することにした。だからチッと考へながら筆をとると云ふことが出来ない。恰も入学試験を受けに行つて答案を書く様な気持をしながら次から次へと書き付けた」

武松の早起は既に壮年期よりのものというが、何時頃からは詳かでない。夜早く就寝、朝3時頃起きて執筆する習慣であった。この頃また岩波講座地理学に、気候学、気候と人生、を執筆した。

武松と岩波茂雄との交誼は、恐らく、藤原咲平を介してであったろう。咲平が同郷の岩波茂雄をその少年時より知っていたことは既に述べた。そして、大正12年「気象学」脱稿の上は岩波書店に交付する予定だったというから、当時既に昵懇の間柄であったものと推定される。以降武松の著書はその大半を岩波書店より印行した。

ここで雑誌「科学」発刊について述べる。稲沼瑞穂氏によれば、<sup>(1)</sup>

「恐らく故岩波茂雄は前々からこの種の雑誌の刊行を考へて居り、講座『物理学及化学』の編集終了とともに岡田、寺田両先生とも相談して、石原先生を中心として編集刊行することを進めてきたのであらう。当時石原先生の assistant として企画にあたったのは菅井準一氏であった」

また柴田雄次博士によれば、<sup>(2)</sup>

「昭和6年正月26日

夜岩波書店の事務所に集るもの岡田、寺田、藤原、関口、小泉、石原の諸博士及予、近く岩波書店より高級科学雑誌を発行する企画ある為めその下相談を行はんと集会なり、結局雑誌の名を『自然』とし46倍版32頁程のものとし英の Nature に倣って編集することとなる。8時頃より席を神保町会芳楼に移し夕食を共にし10時過散会す」

当時の一挿話を武松は記した<sup>(3)</sup>。

「用紙はアート紙を用ひると云ふのは石原氏の固い御

主張でした(略)唯挿画と云ふことを離れて考へると、どうも普通の紙の方が結構であると云ふ寺田君の主張などもあり(略)後のことではあるが、寺田さんが、アンな紙では読み度くない、なんて駄々をこねたことがあった。それも石原さんの居られるところでの話だから面白い」

岩波「科学」は、かくて昭和6年4月その1巻1号を出した。編集に名を列ねるもの、岡田武松、柴田桂太、寺田寅彦、小泉丹、柴田雄次、坪井誠太郎、それに主任石原純であった。後、安藤広太郎、大河内正敏、橋田邦彦、仁科芳雄などが参加した。

## 7.6 大日本気象学会会頭岡田武松

昭和2年5月10日、武松は1級俸を賜い、3年12月15日叙正4位となった。

昭和4年4月藤原咲平は「雲」を刊行し、翌5月10日堀口由己は極東台風論につき御前講演した。

昭和4年5月29日、伊豆諸島及び関西行幸の途次、天皇は東京府下八丈島大賀郷八丈島測候所に、同6月7日海洋気象台に臨幸あった。

藤原咲平の記事によれば<sup>(4)</sup>

「行幸主務官は野口侍従にして岡本侍従之を補け、木下宮内事務官参画する所あり。服部御用掛は岡田台長の親友にして、御学問所の事務に関して以前より時々中央気象台に依頼せらるる等の事あり。此縁故により4月17日先づ服部御用掛中央気象台に来合種々打合せをなす(略)5月18日岡田台長と藤原とにて野口侍従を侍従職に訪い儀礼其他につき指導を受く。(略)5月27日午後、藤原は横須賀より駆逐艦夕風に便乗して八丈に向ふ。此日752耗の低気圧奄美大島附近にありて東に徐行す。」

「陛下は軍艦那智に乗御(28日)午後5時、島の西岸八重根に御到着、(略)此夜風波猛烈にして測候所にては秒速15米を測る。猛雨激しく雨水は窓を透して予定御座室に入り流れをなす。」

幸ひ翌日は天候恢復。天皇は、11時40分頃臨幸、武松自ら原図を作った気候図、地震計など天覧。藤原は昨日来の低気圧経過を奏上、後展望台に成り正午近く還幸となった。

海洋気象台行幸の6月7日は「朝来風和ぎ、陽影朗かに誠に行幸日和とでも」称すべき日であった。

「定刻1時45分、略式自動車鹵簿にて御到着。この時天皇陛下には爽なる純白の海軍様式通常服に大勲位の略章を帯びさせられ、直に本館2階なる御便殿に入御御玉座に着かせられ、岡田台長及び海洋気象台創立功労者河内研太郎氏に単独の謁見を賜ひ、更に堀口、関口、佃、須田、八敏、日高、小野の各技師に列立拜謁を賜りました。

(1) 稲沼、科学、昭和26年4月、20年記念号

(2) 柴田、科学、昭和16年4月、52頁

(3) 岡田、科学 同上

(4) 気象集誌、2輯、7巻7号

終って岡田台長は海洋気象台の創立、沿革、並びに現勢に就いて奏上する所あり、それより新館3階の北端の一室に設けられた天覧室へ玉歩を進められ、台長の御説明により、陳列品を御覧遊ばされました」  
 観測用機械類及び装置すべて54点、図版類14、写真8点資料及び出版物7点。さらに関口の操作により屋上10吋赤道儀式望遠鏡にて太陽黒点像を見、無線通信室にて岡田台長の説明を聞き、別館図書館内の実験室にて「北太平洋表面海流」「瀬戸内海東部潮流」の実験を堀口が説明した。還幸は2時40分頃であった。

この年の10月25日、武松は勳2等に叙せられ、瑞宝章を授けられた。

昭和5年1月3日午後4時、前中央気象台長、気象学会会頭中村精男は脳溢血にて死去した。享年76才。武松は気象集誌2輯8巻5号に「中村精男先生の気象学上の貢献」を掲げ、その論文19篇について一々これを解説した。武松は中村精男退官後「地方測候所長の欠員があった際、県庁の長官から候補者選定の御依頼を受けた時に、イッモ先生の御意見を問ふ為<sup>(1)</sup>」に自宅を訪ふていたという。測候瑣談の「中村精男先生の面影」で先師を追懐した。

「その話は明治45年のことであった。私の子供の易子といふのが9才で上六小学校の3年に居りました。

(略) 宅は旧本丸の中の官舎でした。ある日途中で草履袋を落して泣きながら北白川宮様の銅像の前まで帰って来ると、丁度中村先生が気象台から御宅へ御帰りになるのに出会った。そこで子供が、オザさん私草履をなくしたの、途中にあったら探して頂戴、と頼み込んだものだ。中村先生が、ヨシヨシ探して上げよう、と云はれ、子供はもう安心して帰って来た(略)翌日子供が学校へ行ったらチャンと草履袋をドナタか拾って届けて置いて下さった」

これは抜山大三夫人易と中村精男との一挿話。また、現存の風力塔について、

「例へば中央気象台の風力塔なぞは大きさから、高さ格好まで全く先生の御好みで出来てゐて、(略)私共は上から下まで4間4方の塔では丸で煙突の様だから何とか多少恰好を附けられては如何と手を替へ品を替へて伺って見たものであった。然し先生は一旦良しと御信じになったことはトても頑として御聞き入れがなかった」

この年の日本気象学会総会は5月24日上野の帝国学院にて開催、武松は中村精男の後を継いで会頭となった。そして大正11年以降中絶の学会賞を興し、震災で原型も失われた故新に岡順次の案により大日本気象学会賞牌を制定した。

既述の通り、この昭和5年8月は海洋気象台10周年に

当り「海と空」記念号の<sup>(2)</sup>刊行を見た。その記念号は第1第2と2回に亘り頁数200頁を越えた。またこの時會名を「海洋学会」と改めた。

10月13日、兵庫県出石にては、東京気象台創立当時の地理局長桜井勉が82才で歿した。

同10月16日武松は東京を出発、大阪神戸並に九州地方及び朝鮮の京城仁川へ出張した。仁川では、仁川測候所庭内に立てられた和田雄治胸像除幕式に参列し、内地気象事業関係者を代表して祝辞を述べた。胸像は朝鮮気象事業関係者一同実行委員をあげて基金を集め、胸像を堀信二、台を笹慶一、工事は木下多門、経費約3400円であった。

朝鮮より帰京間もなくの11月4日より同24日まで3週間に亘り気象講習会が催された。参考までにその学科並に実習を示せば、気象(岡田、藤原、築地、西村)天文(関口)地震(国富)気象器械調整(倉石)測風気球観測視程観測器械取扱(三浦)天気図実習(大谷)地震計論(本多)電気実習(塚本)地震実習(本多、鷺坂)無線電信実習(曾我)工場実習(馬場)であった。

「講習生31名は11月24日午後1時20分東京駅を出発し熱海着、中央気象台長の饗宴に預り此処に一泊し翌25日午前8時同地を出発、北伊豆震災地方並に附属箱根山測候所及び三島支台の見学を終へて同日午後4時三島を出発帰京した。本台よりは岡田台長始め藤原、関口、国富、西村、三浦、佐藤、奥山、吉川の諸氏が参加した」<sup>(1)</sup>

明けて昭和6年、その6月1日内閣訓示号外で「今般政府は俸給令を改正し本日(以て)官吏の俸給を減額せり。顧ふに欧州の戦乱に基因せる世界經濟の変調歳と与に愈甚しく今や空前の不況を招来し(略)我邦亦同一の苦境を免るる能はず」云々と述べた。既述の通りこの年満州事変が起り、また北海道、青森は飢饉に見舞われた。

## 7.7 Okada Volume

武松の種蒔いた若き世代の地球物理学は次々と花咲いた。昭和6年学会創立50年を記念して気象集誌は全国に亘って論文を募集、為に第9巻は総頁実に756頁に達した。月次会10回で足りず、臨時講演会9回を開催しているのが見られる。理論気象、海洋、数理統計、輻射、生物、化学等報文は多岐に及んで、昭和3年入台の大谷、島山など、また測候技術員養成所卒業の石丸等の名が見えた。

昭和7年3月14日、深発地震の研究によって学位を授与された和達清夫は、続いて5月10日恩賜賞授賞となり、同11日陪食被仰付、12日學術研究会議主催によって東大講堂で講演した。

一方、同じ昭和7年2月8日、先年の50周年に代表祝詞をよんだ銚子測候所長前田直吉は、明治13年10月の京

(1) 岡田、測候瑣談、159頁

(2) 海と空、10巻8号

(1) 測候時報2巻34号

都府舎密局入り以来在職50年に亘る生涯を閉じた。武松は弔辞を読んだ。

また、その7月、中村記念館工事が始められた。

「全国気象測候従業者に依て兼て計画された故中村台長記念館は此度主務省の許可を得本会にも協賛の上中央気象台構内東側に鉄筋コンクリート一部2階建を建築する運になった。講堂の外事務室、控室等が出来る筈で設計は文部省の福満繁記氏を煩はし工事請負は紫江組に確定した」<sup>(1)</sup>

やがてここに荒井陸男画伯(初代中央気象台長荒井郁之助令息)の中村精男肖像が掲げられる。故中村精男博士遺文集(エスペラント文 107頁)も大石和三郎の序文で日本エスペラント協会版として刊行された。

昭和7年気象協議会は4月20~26日丸の内中央会議所で開かれ開会冒頭「気象事業従業員の技能増進の方法如何」が諮問された。同26日岡田台長在職30年記念論文集の捧呈式が行われた。この論文集は昭和6年10月末日メ切にて募集の上編集され、欧文36篇 400頁は中央気象台欧文彙報第6巻 Okada Volumeとして印行され、荒井陸男画伯筆の武松肖像を原色にて見返しに挿入、巻頭に寺田寅彦の岡田武松教授小伝、及びその著作目録を掲げた。和文はすべて38篇、333頁中央気象台彙報第4冊4号として刊行された。武松時に59才、既に昭和6年4月1日帝国学士院会員被仰付、昭和7年7月15日高等官1等に陞叙され、自ら生涯の頂上にあることを知悉していたに相違ない。

「予て計画中の岡田先生在職30年記念論文集は印刷略々完了せるに付、今回気象協議会出席のため同業各位

の上京中なるを機とし、4月26日会議終了後11時45分より会場に於て盛大なる論文贈呈式が行われた。列席者は当時在京中の測候関係者百数十名の外、東京帝国大学より寺田博士臨席せられ、中央気象台の築地技師司会の下に開会、同台関口技師の事務報告に次いで藤原技師恭しく装禱箱に納めたる和欧両論文集を捧呈し之に対し岡田先生より謙讓なる挨拶の辞あり、海洋気象台の堀口技師門下生を代表して謝恩の辞をのべ、大阪測候所の前田技師測候従業者を代表して祝詞を呈し、肅然たる空気の中に式を了し12時30分閉会したが式後直ちに祝賀午餐会を日比谷の山水楼に催し、会するもの約100人、発起人代表として朝鮮総督府観測所長の祝詞、岡田先生の御挨拶について、大石高層気象台長、根岸下関測候所長、草間関東庁観測所長、杉山宇都宮測候所長、田中岐阜測候所長、高山筑波測候所長、中央気象台国富技師、平野大阪支台長等交々立ってテーブルスピーチに祝意を表し、和気藹々盛会を極め、記念の撮影をなして散会した」<sup>(1)</sup>

昭和8年の気象協議会は4月21日~28日新築の中村記念館で開催された。武松は最近における我国気象上の問題として昨年東北の凶作、11月の台風、三陸の津波を挙げ、気象学に地形を加味し、河湖火山の観測から粗大気候学と微細気候学に論及し、観測を土台とした気象の発達、理論から出発した天気予報の緊要なる理由を説いた。<sup>(2)</sup> 22日黒雅叙園に招待の晩餐会を開き、正戸、馬場、森田等も出席した。24日には伊豆長岡に盛大な懇親会を行い、25日三保にて昨年より実施の飛行機観測を見学した。

(1) 気象集誌、昭和7年

(1) 測候時報、3巻14号昭和7年

(2) 気象協議会議事録

(125頁より)

後には噴石は落下して負電荷の火山灰が上方に、正電荷の噴石が下方にとの負極性の分布を示すようになる。しかし噴石は傘状に拡って落下するから、落下時の火山灰中における噴石密度は小さく、最初の噴煙柱においては火山雷は生じない——爆発の程度が格段に大きい時は生ずるかもしれない。しかし最初の濃密な噴煙柱の負電荷を持った火山灰中に、第2回の噴煙の正電荷を帯びた噴石群が密に突入すれば、その双方の電荷密度の程度によっては局部的に放電が生じようし、又それだけでは放電するだけの十分な電荷が生じていなければ、第2回噴出による電荷分離に加えて、その衝突によって負電荷はますます増加し、第3回の噴石群によって放電が生ずる。しかしあまり時間が経過すると前の噴煙の火山灰が拡散して電荷密度が小となるから、また放電が生じなくなるこのようなものではないであろうか。

なお火山雷の雷鳴は第2回目の如き近距離からでも聴かれなかった。

以上

附記・単なる望見記録からだけの推論で、できたら将来空中電位計、磁力計、ボイスカメラ等を使用して裏付けをしたいと思っております。なお本調査には気象研究所島山所長、石井部長、北川室長諸先生からいろいろと御意見を伺いました。厚礼申し上げます。

#### 文 献

- (1) 安井 豊, 1955~56. : その後の桜島噴火, 福岡管区気象台, 技術通信 1 昭和30年~31年.
- (2) 松田和集, 1915: 大正三年桜島山大噴火実写図, 鹿児島測候所,
- (3) 島山久尚, 1943: 浅間山の噴煙による空中電位傾度の変化, 第2報, 気象集誌 II. 21.
- (4) 永田武也, 1946: 桜島火山の噴煙雲による尖端放電電流, 地震研究所彙報24号,
- (5) 島山久尚, 1943: 浅間山の噴煙による空中電位傾度の変化, 第1報, 第2報, 気象集誌 I 21
- (6) 永田武也, 1946: 桜島火山の噴煙雲による尖端放電電流, 地震研究所彙報24号,